

綺麗に透き通ってどこまでも空っぽだ。無論、今日の空模様について。息を吸う度にひりひりと冷気が肺に沁みて、霜月の訪れを認める。彼の太陽さえも今は家屋の影に隠れて、この場に私を暖めうるものは無かった。厚着に身を埋め、己の体温に縋るばかりである。そのくせ辺りは風がなく、まだ人通りも疎らで、自動車の五月蠅さばかりが鼻につく通学路。

総評―六十点くらいの朝のこと。

登校の時間だ。ふと、そう認識したのは、不意に自分が何をしているのか分からなくなったからだ。そして、間も無く理解する。私は学校に向かって歩いているのだ。考えることなんてしなくても、私は学校に行けるのだ。た。

習慣化された動作は単調で、流れる景色は緩慢。だって、まるで先生のお説教みたいなんだ。話の先の展開が容易に予想できて、現実にも目の前で再現される。そういつた二度手間が時間を倍に引き延ばす。だから、私はそれをしているのが馬鹿らしくなって、ずっと下のほうを見ることにしていた。

両足がせかせか動くのが見える。レギンスと靴下一枚の足は我が身なれど、寒そうだと感じた。私は学校に早く行かなきゃいけない用事は無いし、行きたい理由もなくて、だから、別段急いでいるつもりは無いのだけれど、進む距離に対して運動量が割に合わないという気がする。それは単純に背が低いからかもしれないし、ひよつとするとそれは希望的観測で、私は足が短いほうなのかもしれない。なかった。

……おほん、真面目に言えば、暖かい場所を探して自

然と足も心も逸った、というのが一番しっくりくる解釈である。間違いない。でも学校はゆうても暖かくないから、素直に帰宅したかった。

こういう時、私は自分の理性を恨んだり恨まなかったりする。周りのことなんて気にせず好きなようにすれば、私はきつと幸せなのに。これが私のもっぱらの主張。それに対して、

「社会と折り合うことを投げたら、生きづらいに決まっている」

これは母の言葉。心の中で蘇るたび、納得させられる自分が居る。大体私はこんなことを繰り返して生きてきた。そうしてバランスを保ってこれた。けれど、この言葉が抱える矛盾を無視できるほど大人でもない。

だって、ほら見て！ 社会と折り合ってたって、私こんなに生きづらい！ もう、周りに人も居ないし、叫んでやろうかと。そんな時だった。

「くしゃ」

音がした。左斜め後方から聞こえたその音は、当然私の喉から発せられたものじゃない。もつとこう、鶏の卵を潰したような、軽くて呆気ない音だった。ここは通学路なのに、台所での一幕を想像させるような。私はその矛盾を繰り返す。おかしいな、おかしいな。ここは通学路なのに、どうしてこんなおいしそうな音がするのかな。私はなんだか長らく忘れていた空腹感を思い出したような気がして、自分のお腹が鳴るのを想像した。こういう時に限って私のお腹は鳴らない。でも、そんな苛立ちなんて今はどうでもいい。私は知らないにおいを嗅いだ犬みたいに単純で、そして、好奇心のなすがままに振り返

つたのだ。

音のした位置は、私の左を走る道路の、さらに左側車線だった。その真ん中辺りに、何やら茶色いような白いような物が落ちていた。目を凝らすと、それが一羽の、小さなスズメであることがわかる。スズメは仰向けに、その乳白色の柔らかそうな腹を晒している。起き上がるうと羽が時折震えるから、まだ生きていることは分かる。けれど、もう自力で起き上がることがないのは明白だった。私はそこで少し、視野を広げて辺りを見回した。他に音の正体に成り得るようなものはない。ただ、道路のちょうど真上の電線に、同じような背格好のスズメが四羽、下を見下ろすばかりである。今度はゆっくりと視線を下にずらす。すると、仰向けのスズメが再び視界に入った。落ちてきたのか？ スズメはびくびくと痙攣するよに震える。頭から落ちて、脳震盪にでもなったのだろう。でもどうして。

『落ちてきたのか？』鳥は空を飛べるのに。

ピヨピヨ。空を忙しく飛び交うスズメを想像する。(彼らはきつと、自分たちを自由だとは思っていないんだろ(うな)彼らは大抵何匹かで群れて飛んでいる。(私は空を自由に飛ぶ鳥たちを羨む人々を軽蔑していた)そういうえと、可愛らしい彼らにも天敵は居たのだったっけ。(もつと大きな鳥とか？ ネコとか？ ヒトとか？ あと、クルマとか？)飛べるのも、案外楽じゃないよね、なんて。(車…?)

今は通勤の時間帯だから、そこまで大きな通りじゃないことだって、列が出来るほどじゃないにしても自動車の通りは少なくないはずで、だからこそ車たちはいつも結構なスピードを出していて、むしろ今までが少な過ぎたくらいで、私はああ、もつと早く気づいたらな、なん

て思いながら、自動車の五月蠅さが今も、鼻についていた。

黒塗りの乗用車。その速度は緩むことなく、私たちを追い越していった。目で追いかけなかったから、それ以外は分からない。スズメは道路の真ん中で仰向けになっていたから、タイヤとタイヤの間をすり抜けて、真っ赤になつてアスファルトにへばり付いていたりはしなかった。風にあおられて、その位置と体勢を変えたただけ。スズメは起き上がっていた。足は畳まれ、今度は顔をこちらに向けている。

ピヨピヨ。つぶらな瞳がこちらに向けられている。私はその様子を鮮やかな心情をもって見ていた。(スズメは先ほどよりも、道路の端に寄っている)スズメは動かない。開かれた瞳は本当は何も映してなんていなくて、気を失っているのかも。(ちょうどタイヤが通る辺りで)ちよこんと座るスズメはふわふわしてとつても可愛い。(はやくはやく)触つて触つて、撫でてあげたい気持ちが逸る。(次のクルマが来ちゃう)道路と歩道との間には飛び越えられるくらいの植え込みがあつて、私はさらに右側車線を越えなければスズメの元には行けない。(死んじやう、死んじやうよ)私は、私だったら助けて欲しいと思うだろうなと思った。(ピヨピヨ)だから、私は覚悟を決める。

一つ、想像をした後で。

今助けに行くからね。私は善意に駆られるがまま、スズメの救出作戦を開始した。まずは、一歩後ずさり、助走をつけて、勢い良く地を蹴る。跳び上がると、そのま

ま深緑の植え込みを越えて、車道へと降り立つ。着地の衝撃は殺さず、そのまま前への推進力に変える。私の頭の中は慈しみに支配されていて、その愛くるしい体躯から目を背けることができない。みるみるうちに距離は縮まる。先程まではなかったはずの風が頬を撫でる。私は早くも喜びを感じつつあった。何処からか誰かの叫び声が聞こえて、けれど、それが、私に対する批判であれ称賛であれ、私は嬉しい。スズメを助けたその時、私はきつと誰よりも正しい。どのような誇りを受けようと毅然とした態度でいられる準備が、そこにはある。そして、見ていただけの人達の心に生まれる劣等感を笑つて小突いてやれたなら、どんなに良い気分だろう？ 右側車線を越えようと、もう目の前にスズメの姿があつた。速度を落として、ああ、ようやく手が届く。しゃがみ込むと、優しく、包むようにすくい上げる。スズメは一度ぶると震えて、けれど暴れることはなくそれを受け入れた。それはどんな感触だろう？ 生温かく、押ししたら凹むといった具合に柔らかく、不意に力の加減を誤れば潰れてしまふようなほどに繊細な何か。羽毛があまりにふわふわで、包んでいるこちらが逆に包まれているような錯覚を覚えるのだろうか。私は安堵の息を吐き、分かちがたいもののようにその背を撫でる。

想像。

「痛い！」

私は思わずそう心の中で叫んだ。その惨劇の何と痛々しいことであるよ。きつと血がダラダラ流れて、死んじやうかも知れないのだ。私は気を取り直して、再び通学

路を歩き出した。危ない危ない。私が私の善意に殺されるところだった。汚れを払うみたいにお腹をはたはたと叩いて、安堵の息を吐く。私は振り返ることなく、先ほどより気持ち大股に歩く。建物や樹々の隙間から、ちらちらと太陽が覗いた。学校に行こう。生憎と、もう家よりも学校のほうが近い。私は歩く。今日は友達と何を話そうかな、なんて考えながら。

最後に、遠く後ろで

「くしゃり」

爽やかな朝に相応しい、軽快な音がした。